

《開幕》アナザーエナジー展： 挑戦しつづける力—世界の女性アーティスト16人

2021年4月22日(木)ー9月26日(日) 森美術館(六本木ヒルズ森タワー53階)

71歳から105歳まで、全員現役！

森美術館は、2021年4月22日(木)から9月26日(日)まで、「アナザーエナジー展：挑戦しつづける力—世界の女性アーティスト16人」を開催します。

近年、ジェンダー、人種、民族、信条など多様なアイデンティティの不均衡を正し、ダイバーシティ(多様性)を重視する動きが世界各地に広がっています。現代アートにおいてもこの10年ほどの間、1950年代から70年代に活動を始め今日まで継続してきた女性アーティストたちに注目が集まっています。

「アナザーエナジー展」では、今なお世界各地で挑戦を続ける70代以上の女性アーティスト16名に注目し、その活動に光を当てます。16名の年齢は71歳から105歳まで、全員が50年以上のキャリアを誇ります。また、出身地は世界14カ国におよび、現在の活動拠点も多岐にわたります。彼女たちは、それぞれが置かれた環境や時代が激しく変化し、美術館やアート・マーケットの評価や流行が移り変わるなか、それらにとらわれることなく独自の創作活動を続けてきました。

本展では、絵画、映像、彫刻、大規模インスタレーションにパフォーマンスなどの多彩で力強い作品約130点を通して、彼女たちを突き動かす特別な力、「アナザーエナジー」とは何かを考えます。世界が未曾有の事態にある今、これら16名のアーティストたちが確固たる自らの信念を貫き生涯をかけて歩み続けている姿は、私たちに困難を乗り越え、未来に向けて挑戦するための力を与えてくれることでしょう。



カルメン・ヘレラ
《ディプティック》
1978年
アクリル絵具、キャンバス
127.6×254×5.7 cm
所蔵：エル・ムセオ・デル・バリオ(ニューヨーク) トニー・ベチャラ寄贈

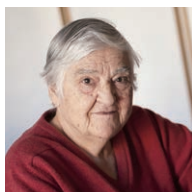


ヌヌンWS
《Verzon 2番》
2020年
アクリル絵具、キャンバス
150×125 cm

プレスリリース お問い合わせ 森美術館 広報事務局(共同ピーアール内): 日比、松川、伊藤、花上
Tel: 03-3571-5258 E-mail: mam-pr@kyodo-pr.co.jp

出展アーティスト * 姓のアルファベット順

- エテル・アドナン 1925年ベイルート生まれ、パリ在住
- フィリダ・バーロウ 1944年英国、ニューカッスル・アポン・タイン生まれ、ロンドン在住
- アンナ・ボギギアン 1946年カイロ生まれ、同地在住
- ミリアム・カーン 1949年スイス、バーゼル生まれ、ブルガリア在住
- リリ・デュジュリー 1941年ベルギー、ルーセラーレ生まれ、ローフェンデゲム在住
- アンナ・ベラ・ガイゲル 1933年リオデジャネイロ生まれ、同地在住
- ベアトリス・ゴンザレス 1932年コロンビア、ブカラマンガ生まれ、ボゴタ在住
- カルメン・ヘレラ 1915年ハバナ生まれ、ニューヨーク在住
- キム・スンギ 1946年韓国、扶餘(ブヨ)生まれ、パリ在住
- スザンヌ・レイシー 1945年カリフォルニア州ワスコ生まれ、ロサンゼルス在住
- 三島喜美代 1932年大阪府生まれ、同地および岐阜県在住
- 宮本和子 1942年東京都生まれ、ニューヨーク在住
- センガ・ネングディ 1943年シカゴ生まれ、コロラド州コロラドスプリングス在住
- ヌヌンWS 1948年インドネシア、ラワン生まれ、ジョグジャカルタ在住
- アルピタ・シン 1937年インド、バラナガル生まれ、ニューデリー在住
- ロビン・ホワイト 1946年ニュージーランド、テ・ブケ生まれ、マスタートン在住



エテル・アドナン
撮影: Gilles Bassignac



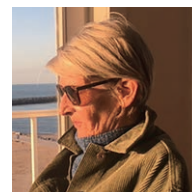
フィリダ・バーロウ
撮影: Cat Garcia



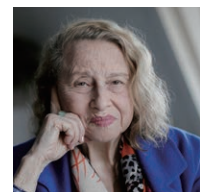
アンナ・ボギギアン
撮影: Christopher Mohan



ミリアム・カーン
画像提供: ワコウ・ワークス・オブ・アート(東京)



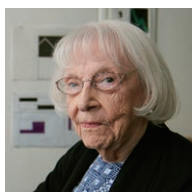
リリ・デュジュリー
撮影: Rita Vereecke



アンナ・ベラ・ガイゲル
撮影: Diana Tamane
画像提供: Mendes Wood DM, São Paulo/Brussels/New York



ベアトリス・ゴンザレス
撮影: Revista Avianca



カルメン・ヘレラ
撮影: Jason Schmidt
画像提供: Lisson Gallery



キム・スンギ
撮影: Patrick Bokanowski



スザンヌ・レイシー
撮影: Brittany Valdez



三島喜美代
撮影: 飯川雄大



宮本和子
撮影: Christian Siekmeier



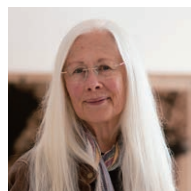
センガ・ネングディ
撮影: Ron Pollard



ヌヌンWS



アルピタ・シン



ロビン・ホワイト
撮影: Harry Culy
画像提供: McLeavey Gallery, Wellington

プレスリリース

お問い合わせ 森美術館 広報事務局(共同ピーアール内): 日比、松川、伊藤、花上
Tel: 03-3571-5258 E-mail: mam-pr@kyodo-pr.co.jp

開催概要

展覧会名:「アナザーエナジー展：挑戦しつづける力—世界の女性アーティスト16人」

主催: 森美術館

助成: 大和日英基金、スイス・プロ・ヘルヴェティア文化財団

後援: 在日スイス大使館

協賛: トヨタ自動車株式会社、アクセンチュア株式会社、

あいおいニッセイ同和損害保険株式会社、株式会社LIXIL、日本マクドナルド株式会社、

みずほ証券株式会社、ユニ・チャーム株式会社

協力: 日本航空

企画: 片岡真実(森美術館館長)、マーティン・ゲルマン(インディペンデント・キュレーター)

会期: 2021年4月22日(木)–9月26日(日)

会場: 森美術館(東京都港区六本木6-10-1 六本木ヒルズ森タワー53階)

開館時間: 10:00–22:00(火曜日のみ17:00まで)

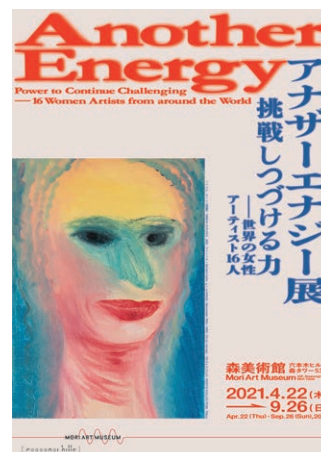
* 新型コロナウイルス感染症対策として東京都23区にまん延防止等重点措置が適用されたことを受け、4/22(木)–5/11(火)の期間は閉館時間が20:00(火曜日は17:00、ただし、5/4(火・祝)のみ20:00)となります。

* 入館は閉館時間の30分前まで * 会期中無休

* 営業時間の最新情報はウェブサイトでご確認ください。

* 当館の新型コロナウイルス感染症対策への取り組みについてはこちらをご確認ください。

<https://www.mori.art.museum/jp/news/2021/04/4624/index.html>



入館料:

	[平日]		[土・日・休日]	
	当日窓口	オンライン	当日窓口	オンライン
一般	2,000円	1,800円	2,200円	2,000円
学生(高校・大学生)	1,300円	1,200円	1,400円	1,300円
子供(4歳~中学生)	700円	600円	800円	700円
シニア(65歳以上)	1,700円	1,500円	1,900円	1,700円

* 事前予約制(日時指定券)を導入しています。専用オンラインサイトから「日時指定券」の購入・予約が可能です。

* 専用オンラインサイトでのチケット購入・予約は、各日18:30~19:00の回が最終となります。19:00以降のチケットは、当日窓口にてお買い求めください。

* 表示料金は消費税込 * 4月30日(金)、5月6日(木)、5月7日(金)は、[土・日・休日]料金

* 本展のチケットで、同時開催の「MAMコレクション013:さまざまな線、宇宙のぜんぶ—草間彌生、プラバヴァティ・メッパイル、ツイ・チャウエイ(蔡佳葳)」 「MAMスクリーン014:シプリアン・ガイヤール」 「MAMプロジェクト029:オスカー・ムリーリョ」をご鑑賞いただけます。

* 東京シティビュー(屋内展望台)、スカイデッキ(屋上展望台)、森アーツセンターギャラリーへの入館は別料金になります。

一般のお問い合わせ: Tel: 050-5541-8600(ハローダイヤル) 森美術館ウェブサイト www.mori.art.museum

最新のプレス画像は、こちらの URL より申請・ダウンロードいただけます。

<https://bit.ly/2ZsHTID>

プレスリリース お問い合わせ 森美術館 広報事務局(共同ピーアール内): 日比、松川、伊藤、花上
Tel: 03-3571-5258 E-mail: mam-pr@kyodo-pr.co.jp

本展の特徴

■ 参加アーティスト16人全員が70代以上、アーティストとしてのキャリアは50年以上！

戦後動乱期の1950年代から1970年代にかけて活動を始め、2021年の現在に至るまで世界各地で制作活動続ける女性アーティスト16人に光を当てます。年齢は71歳から105歳まで、彼女たちの50年以上におよぶキャリアを、初期作品から代表作、本展のための新作まで多角的に紹介します。

■ 世界14か国出身のアーティストたちは、世界をどう見てきたのか

アーティスト16人の出身地、現在の活動拠点、表現方法、さらに生き方は実に多様です。各アーティストの実践や人生を通して、フェミニズム、移民の歴史など、世界の問題や数々の事象が見えてきます。

■ 美術史のさまざまな解釈

グローバリズムが広がり、多文化主義への理解が進むなか、美術の世界でも、それまで欧米を中心に語られていたアートから脱却し、様々な地域の文化や歴史を主題にする作品や、非欧米圏出身のアーティストが注目されるようになりました。また、それまで一元的に捉えられていた美術史は、それぞれの歴史、人種、民族、ジェンダーなどに基づく多元的なものとして理解され始めました。本展の参加アーティストの活動が注目されるようになった今世紀(2000年以降)に、このアートの潮流が大きく重なります。

■ 各作家の独自性や作品の存在感を提示できる空間スケールを重視しつつ、作家同士のつながりが見えてくる多彩な展示構成

本展は、長いキャリアを誇る女性アーティストを網羅的に見せるいわゆる「サーベイショー」とは異なり、アートの国際的動向へ目を向けながらも、各アーティスト独自の作家性、文脈や作品の存在感を提示できる空間スケールを重視しています。また、全く異なる背景をもつアーティストたちの作品を併置することで、地域や文化圏を超越した視覚的な共通性や類似性を示しつつ、それぞれの作品の背景にある文脈や独自性を浮き彫りにすることを試みます。

■ 展示とアーティストにさらに迫る展覧会カタログ2種

本展の開幕に際し、「ガイド版」と通常版2種の展覧会カタログを刊行します。展覧会鑑賞の手引きに適した「ガイド版」は、展覧会初日の4月22日に発売。二人のキュレーターによる主論考2本と対談のほかに、各アーティストの解説や作品図版などを掲載します。一方、通常版には、前述の主論考2本に加え、各アーティストの個人史や作品の変容に焦点を当てた世界各地の専門家による論考16本、さらに本展の展示風景図版を掲載して6月上旬から販売予定です。美術館における展覧会での実体験とあわせ、本カタログを通してさらにアーティストたちの「アナザーエナジー」を知ることができます。

プレスリリース お問い合わせ 森美術館 広報事務局(共同ピーアール内): 日比、松川、伊藤、花上
Tel: 03-3571-5258 E-mail: mam-pr@kyodo-pr.co.jp

16人の「アナザーエナジー展」アーティスト * 姓のアルファベット順

エテル・アドナン

エテル・アドナンは、フランス統治下のレバノン(1943年にフランスから独立)に生まれ、公用語としてフランス語を、家庭内ではトルコ語とギリシャ語を話すという環境で育ちました。ペイルートの大学でフランス文学を学び、その後、パリ大学とハーバード大学、カリフォルニア大学ロサンゼルス校で哲学を学びます。1952年から1972年まで、カリフォルニア州にあるドミニカン大学で哲学を教え、1972年に帰国後は、1976年まで文化担当記者として新聞社で働いていました。1977年にレバノン内戦を題材にした小説『シット・マリー・ローズ』を出版しフランス=アラブ諸国賞を受賞。本作は10か国語以上に翻訳されています。アドナンの絵画は2000年代に改めて注目され、以降、ドクメンタ13(2012年)、ホイットニー・ビエンナーレ(2014年)、シャルジャ・ビエンナーレ12(2015年)などの主要国際展に招待されています。近年は、サンフランシスコ近代美術館(2018年)、パウル・クレー・センター(ベルン、2018年)など世界の主要美術館で個展を開催しています。

詩人であり、小説家、哲学者、そして、アーティストであるアドナンは、既存のカテゴリーにとらわれることなく領域を横断する創作活動を続けてきました。1960年代のアメリカでフェミニズム運動やベトナム反戦運動に触れたこと、また、アルジェリア戦争(1954-1962年)に感化されたことから、統治国の言語であるフランス語ではなく英語での詩作を始めます。1967年には詩集『ベトナムはどこ』に詩が掲載されましたが、慣れない英語の不自由さから、視覚言語を用いた詩として絵画を独学で始めたといえます。

アドナンの絵画は、抽象的な図形を組み合わせて風景を描いていますが、これは空や山の実際の形を写すのではなく、その場所で感じた感覚や感情を形と色彩に置き換えたものです。絵画のサイズは原稿用紙とほぼ同じ寸法で小さく、また、1960年代前半からは本の形態をした作品を制作していたことから、絵画と詩の結びつきの強さがわかります。

一見すると牧歌的なアドナンの作品の背景には、母国で起きた戦争への思いがあります。1975年から15年に及んだレバノン内戦によって、経済は衰退し、国土は荒廃し、かつて「中東のパリ」と言われた首都ペイルートの街並みや文化遺産も破壊されました。内戦を題材にしたアドナンの代表的な詩集である『アラブの黙示録』(1980年)の最後には、「知識、愛と平和」と記されています。現在96歳になるアドナンはより良い世界を望み、いまま創作を続けているのです。



エテル・アドナン 《無題》 2018年
油彩、キャンバス 55×46 cm
Courtesy: Sfeir-Semler Gallery
Beirut/Hamburg

フィリダ・バーロウ

フィリダ・バーロウは、1966年にユニバーシティ・カレッジ・ロンドンのスレード美術学校を卒業し、自身も1960年代から教鞭をとり後進育成に大きく貢献しました。5人の子供を育て上げ、2009年に定年退職後、ロンドンのサーペンタイン・ギャラリーで開催された二人展「ナイリー・バグラミアンとフィリダ・バーロウ」(2010年)をきっかけに、国内外での注目が急激に高まりました。これまでニューヨークのニュー・ミュージアム(2012年)、テート・ブリテン(2014年)、ロイヤル・アカデミー・オブ・アーツ(2019年)など10箇所以上で個展を開催し、2017年には第57回ベネチア・ビエンナーレに英国館の代表として出品しています。

バーロウの作品は、セメントや集合材、段ボールなど安価な工業用材料を使い、崩れ落ちそうな構造や立ち上がりそうな形状など、別の状態へ移行する間際にあるかのような造形を特徴とします。バーロウは表面や形の美しさではなく素材そのものへ関心を寄せ、また、作品と展示空間の関係性も重要な要素として取り込んでいます。

2011年に発表された《リグ》は、展示場所となった元銀行の建物の地下室から屋根裏、床から天井まで、建築物全体を作品が占拠し、観客がその隙間を通り抜けながら鑑賞するというものでした。カラフルな布や球体、セメントの塊、内部が剥き出しの木材の構造体などが、圧倒的な量とスケールで迫り、見るものに直感的で感情的な体験をもたらす表現は、バーロウの他の作品にも一貫しています。

第二次世界大戦から復興を遂げようとする物資が豊かではない時代のロンドンで幼少期を過ごしたバーロウは、身のまわりのものを自身で作るようになっていたといえます。空襲によって内部が剥き出しになった建物や瓦礫の山からも強い影響を受けています。1960年代から世界的に広がったコンセプチュアル・アートをはじめ、理論偏重型である欧米の美術史、美術批評の流れの中でも、バーロウのものづくりへの情熱は冷めることはありませんでした。理論よりも素材や造形そのもの、個人の経験に重きをおき、手を動かして作るという行為の中に無限の可能性を探求する姿勢は、いまだ衰えることのないバーロウの創造性に繋がっています。



フィリダ・バーロウ 《無題:キャンバスラック》; 2018-2019
2018-2019年
コンクリート、キャンバス、ハードボード、塗料、プラスチック、
集合材、鉄、テープ、木材 サイズ可変
Courtesy: Cross Steele Collection
展示風景:「袋小路」ロイヤル・アカデミー・オブ・アーツ
(ロンドン) 2019年
撮影: Damian Griffiths *参考図版

プレスリリース お問い合わせ 森美術館 広報事務局(共同ピーアール内): 日比、松川、伊藤、花上
Tel: 03-3571-5258 E-mail: mam-pr@kyodo-pr.co.jp

アンナ・ボギギアン

アルメニア系の両親のもとエジプトのカイロに生まれたアンナ・ボギギアンは、カイロのアメリカン大学で哲学と政治学を学び、その後、カナダのモントリオールにあるコンコーディア大学で美術と音楽を学びました。2007年のテッサロニキ・ビエンナーレへの参加をきっかけに国際的な評価が高まります。以降、ドクメンタ13(2012年)や第56回ベネチア・ビエンナーレのアルメニア館(2015年)など主要国際展に招待され、近年は、ニューヨークのニュー・ミュージアム(2018年)やテート・セント・アイヴス(2019年)など、欧米の主要美術館で個展を開催しています。

ボギギアンはこれまで、世界各地を訪れ、その土地の文化や歴史、社会状況を題材に作品を制作してきました。抽象絵画から始まり、塩、蠟、木材、銅、鉄、綿など多様な素材を組み合わせるダイナミックな表現を特徴とし、彫刻やインスタレーションなど幅広い作品群を発表しています。

作品には、錬金術、解読不可能な文字、スフィンクスやギリシャ神話の登場人物などミステリアスなイメージやシンボルが散見されます。ヘーゲル、カール・マルクス、マキャベッリ、プラトンなどの哲学者や詩人を題材にした作品も多数あります。なかでも近代ギリシャ最大の詩人といわれるコンスタンディノス・ペトルゥ・カヴァフィス(1863-1933年)を扱った作品は多く、1995年から現在までに計300点以上を制作しています。ボギギアンはカヴァフィスの詩における歴史性に注目し、自身の表現でも詩情と歴史的事象を重要な要素として扱ってきました。

幼少期に経験したエジプト革命(1952年)とスエズ戦争(第二次中東戦争、1956年)、その後も続く不安定な国内情勢、そして、紛争や自然災害によって文化が破壊されてきた母国を含む中東の状況は、ボギギアンの作品に多大な影響を与え続けています。近代化やグローバル化によって世界は均質化したように見えますが、ボギギアンは世界をいまだ不可解で、常に移り変わる混沌として描いています。その作品は、世界中を移動しながら複層する歴史を読み解いて編纂した壮大な人類史のようです。



アンナ・ボギギアン 《制度 vs 大衆》 2019年
展示風景：「正方形、線と定規」パリ国立高等美術学校 2019年
撮影：Nicolas Brasseur *参考図版

ミリアム・カーン

ミリアム・カーンは、ユダヤ人の両親のもとスイスのバーゼルに生まれました。両親ともにナチス・ドイツの迫害から逃れるため、それぞれドイツとフランスからスイスに移住していました。1968年から1973年までバーゼル芸術専門学校で学び、1977年にバーゼルの主要な文化施設であったシュタンパで初の展覧会を開催、1983年に美術館での初個展をクストハレ・バーゼルで開き、以降、多数の展覧会に参加しています。近年も、ドクメンタ14(2017年)や第21回シドニー・ビエンナーレ(2018年)などの主要国際展に参加し、2019年には大規模個展を開催、ベルン美術館(スイス)、ハウス・デア・クスト(ドイツ)、ワルシャワ近代美術館(ポーランド)の3館を巡回しました。

カーンの絵画の特徴である力強い木炭ドローイングや色彩豊かな油彩は、差別や暴力などの社会問題、戦争、ユダヤ人女性である自身のアイデンティティに深く関わっています。多感な時期を過ごした1960年代から70年代は、世界各地で政治的な運動が高まりを見せた時期でもありました。スイスでは1971年に女性参政権が認められ、1977年には女性のための重要な組合OFRAが発足し、カーンも一時期参加していました。

彼女は原子力発電所建設の反対運動にも関わっていましたが、これには原爆開発に携わった科学者がナチス・ドイツに反対するユダヤ人だったことも影響しています。戦争や原子力開発といった政治的な動向と、それに翻弄される個人の関係性は、スイスへ亡命した彼女の両親の人生とも重なります。その歴史を聞いて育ったカーンにとって、2015年の欧州難民危機が作品に投影されるのは自然なことだったといえるでしょう。出品作《美しいブルー》(2017年5月13日)で、鮮やかな水色の画面にぼんやりと浮かび上がっているのは、大海に沈んでいく難民の姿です。

カーンの作品は、彼女自身のアイデンティティや特定の時代と場所から生み出されたものでありながら、現代の世界を貫く普遍性にも通じています。かつてカーンがOFRAの活動から離れたのは、女性であることを意識しながらも、性差を越えた地点での創作活動に意識を向けたからでした。彼女の思想には、世界の難民問題や原子力問題、ひいては動植物を含めた森羅万象など、あらゆる次元での平等性が貫かれています。世界中で融和や寛容よりも、批判や分断が人々の意識を占有しつつある今日、ミリアム・カーンの芸術はより輝きを放つでしょう。



ミリアム・カーン 《美しいブルー》
2017年5月13日 油彩、キャンバス
200×195 cm
所蔵：ワコウ・ワークス・オブ・アート(東京)

プレスリリース お問い合わせ 森美術館 広報事務局(共同ピーアール内): 日比、松川、伊藤、花上
Tel: 03-3571-5258 E-mail: mam-pr@kyodo-pr.co.jp

リリ・デュジュリー

リリ・デュジュリーは1960年代にベルギーで活動を開始し、1989年から一年間ベルリンに滞在しますが、それ以外はベルギーを拠点としています。これまで数々の展覧会に参加してきましたが、2000年以降、その活動が改めて注目され、ドクメンタ12(2007年)、第7回光州ビエンナーレ(2008年)、シャルジャ・ビエンナーレ9(2009年)、第21回シドニー・ビエンナーレ(2018年)などの主要国際展に招待されています。2015年にはゲント現代美術館とミュ・ゼー(ベルギー、オーステンデ)両館で大規模な個展が同時開催されました。

多様な手法と素材を用いて制作されるデュジュリーの作品は、数少ない要素で構成する洗練された詩的表現を特徴としています。1970年代には写真と映像の先駆的な作品を発表し、1980年代中頃からは、鉄、大理石、鉛、粘土、石膏などの重量のある素材を用いた立体を制作してきました。近年の彫刻作品には、強度のない粘土や張子などが用いられ、より繊細でエフェメラルな表現に変化しています。主題に関しても、政治的な内容から、文学や音楽、西洋美術史など多岐にわたり、作品タイトルは古典文学からとられたものも多く、モチーフは西洋絵画から引用されたドレープ(布)や窓、額縁、海など様々です。

1970年代の映像や写真作品には自身の身体を用いていますが、そこにも西洋絵画史やフェミニズムなど、様々な文脈が含まれています。伝統的な西洋美術の中では、女性のヌードは男性アーティストの欲する対象、もしくは所有物として見られてきました。また、1970年代のブリュッセルは、女性だけでは賃貸契約を結べず、男性の署名が要求される不平等な状況があったといえます。そうした歴史的背景や現実を前に、デュジュリーは自身の身体を被写体にすることを選びました。身体はキャリアを通じて重要なモチーフとなり、そこには家庭や実存など複層的な意味が含まれていきました。

デュジュリーの作品の詩情と抽象表現は、何か特定のものを明らかにするのでも、覆い隠すのでもありません。出品作《無題(均衡)》(1967年)に見られるように複数の要素が拮抗する状態を表現することで、アーティストと被写体、動作と静止、空間と時間など、本質的な要素の関係によって作り出される何らかの中間領域に鑑賞者の意識を向けさせ、新たな発見をもたらします。それは瞑想的であり、どこか東洋的でもあります。



リリ・デュジュリー 《無題(均衡)》 1967年
鋼鉄、鉄 平板: 45×75×0.3 cm、棒: 300.6×φ2.2 cm
展示風景:「時のひだ」ミュ・ゼー(ベルギー、オーステンデ)
2015年 撮影: Dirk Pauwels

アンナ・ベラ・ガイゲル

ポーランド系ユダヤ人の両親のもとリオデジャネイロに生まれたアンナ・ベラ・ガイゲルは、16歳頃からフォイガ・オストロヴァ(1920-2001年)のもとで絵画を学び始め、17歳の頃には国が主催する美術展に出品、1952年からリオデジャネイロ連邦大学で言語学と文学を学び、1954年にはニューヨークに留学し美術史を学びました。1961年以降サンパウロ・ビエンナーレに6回出展するなど国内では20代の頃から注目され、1980年には第39回ベネチア・ビエンナーレに参加し、以降活躍の場を世界に広げています。近年は、サーペンタイン・ギャラリー(ロンドン、2018年)、ザヘンタ国立美術館(ワルシャワ、2018-2019年)、ゲント現代美術館(2021年)など、欧米の主要美術館で個展を開催し国際的な再評価が高まっています。

ガイゲルの作品は、絵画、版画、コラージュ、映像、インスタレーションなど、キャリアを通じて緩やかに拡張し続けてきました。初期の作品には情動的な抽象表現であるアンフォルメルに影響を受けた絵画があります。1964年以降は、人間の内臓をモチーフにした「内臓位相」と呼ばれるシリーズをはじめ、具象的なモチーフが描かれています。

1960年代後半からは、開発途上国やグローバル・サウスという概念に近い「周辺国」という政治的、地理的な自国のアイデンティティを題材とし、版画やコラージュ、アッサンブラージュなどを制作しています。先住民のポロロ族や日々の食事をモチーフに、自国の歴史や文化を考察した作品もあります。なかでも、地図や地形、タイポグラフィを用いた作品が多く、これには地理学者である夫のペドロ・ガイゲル(1923年-)と、自身が大学で言語学を学んでいたことが影響しています。さらに、1970年代にはコンセプチュアル・アートやビデオアートなど新しい表現にも取り組みました。

1987年に美術批評家のフェルナンド・コッチアラレー(1952年-)と共著で出版した『幾何学とアンフォルメルの抽象: 1950年代のブラジル・アバンギャルド』は、ブラジル現代美術の研究において重要な書籍となっています。地理学、地政学、そして歴史研究に裏打ちされた60年以上にわたるガイゲルの作品群は、現在の世界地図に隠された政治性、紛争や搾取の歴史を、独自の視点から明らかにします。



アンナ・ベラ・ガイゲル 《アートの社会空間》 1977年
タイプライティング、フォト・シルクスクリーン印刷、紙
32.4×44.3 cm

プレスリリース

お問い合わせ 森美術館 広報事務局(共同ピーアール内): 日比、松川、伊藤、花上
Tel: 03-3571-5258 E-mail: mam-pr@kyodo-pr.co.jp

ベアトリス・ゴンザレス

ベアトリス・ゴンザレスは、コロンビア国立大学で建築、アンデス大学で美術を学び、1964年にはボゴタ近代美術館で女性アーティストとして初となる個展を開催しました。以降、第11回サンパウロ・ビエンナーレ(1971年)や第38回ベネチア・ビエンナーレ(1978年)に出展し国際的な注目を浴びるようになった一方で、国内では長年にわたりキュレーターや美術史家としても活躍しています。2019年から2020年にかけて大規模な回顧展が開催され、マイアミ・ベレス美術館、ヒューストン美術館(テキサス)、ミゲル・ウルティア美術館(ボゴタ)を巡回しました。

ゴンザレスはこれまで、新聞や雑誌などのメディアからイメージを引用することでコロンビアの政治的、社会的状況を表現してきました。絵画では、タブローという形式にとらわれることなく、カーテンや筆筒などの日用品を支持体に用いるなど実験的な作品を発表しています。1970年代の代表的な作品にはレオナルド・ダ・ヴィンチなどの名画の一部を家具に描いたものがあります。これは1960年から1970年代にコロンビア国内で大量に出回るようになった質の低い名画の模造品に着想を得ており、その粗悪さが、美術の中心がヨーロッパにあり、そこから遠く離れているという自国の周辺的なアイデンティティを表しています。

それまでも自国の文化や消費社会だけでなく、国内の政治情勢などに言及した作品を制作していましたが、1978年に大統領に就任したフリオ・セサル・トゥルバイ・アヤラ(1916-2005年)による反政府主義者への抑圧、さらに1985年に発生し多数の犠牲者を出したコロンビア最高裁占拠事件の衝撃は大きく、当時の心境についてゴンザレスは「もう笑っていられなくなった」と語っています。1980年以降は、より政治的な主題に向き合うようになり、トゥルバイを描いたドローイング、虐殺された死体のシルエット、悲しみに暮れる女性の姿など、新聞や雑誌から引用されたイメージを用いて、もうひとつの自国の姿を描いてきました。

ゴンザレスは、消費社会や大衆メディアのイメージを通じてコロンビアの自画像を描いてきたといえます。「アートは歴史が言えないことを伝えてくれる」というゴンザレスの言葉通り、その作品には、メディアに氾濫する図像に隠された、自国のアイデンティティ、暴力、名もなき人々の声や悲哀が表現されています。



ベアトリス・ゴンザレス 《無名のオーラ》 2007-2009年
展示風景：ボゴタ中央墓地(コロンビア) 2007-2009年
撮影：Laura Jiménez

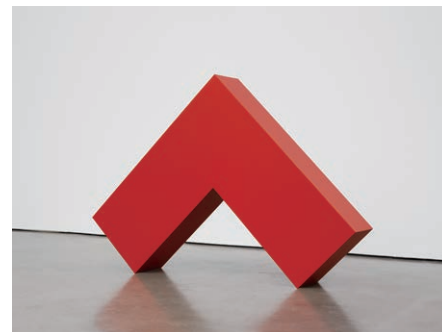
カルメン・ヘレラ

カルメン・ヘレラはハバナで建築を学び、1939年に結婚を機にニューヨークへ移住しアート・スチューデント・リーグで絵画を学びました。1948年から1953年の間パリに居住し、その後は現在までニューヨークを拠点に活動しています。1984年に初の回顧展をオルタナティブ・ミュージアム(ニューヨーク、2000年に閉館)で開催したものの、作品が評価されはじめたのは90歳を過ぎた2005年頃でした。以降、国内外の主要な美術館で個展を開催し、アート・マーケットでも作品価格が高騰しています。101歳の時にニューヨークのホイットニー美術館で大規模な回顧展「カルメン・ヘレラ：視覚の直線」(2016-2017年)が開催されました。

ヘレラは1950年代初頭から、限られた色彩で幾何学図形を描く抽象絵画を制作してきました。1960年代からは絵画のほかに、「抽象に向かう建築としての彫刻」である「エストゥルクトゥラス」(構造)シリーズも制作しています。

その表現は西洋近代美術の流れを汲み、1950年代のニューヨークのアートシーンと呼応するもので、母国キューバやラテン・アメリカ美術との関連は薄いといえます。一方で、禅の思想に関心があったことが出品作《京都(緑)》(1966/2016年)からうかがえます。近年の評価では、エルズワース・ケリー(1923-2015年)やフランク・ステラ(1936年-)と並び、米国におけるミニマリズム絵画の先駆者のひとりだと考えられています。

流行が激しく移り変わるアート界で、頑なに幾何学の抽象絵画を制作してきたヘレラの活動は70年に及びます。精緻な線と形が織りなす作品には、長い歳月によって研ぎ澄まされた厳格さとしなやかさが共存しています。105歳になる現在も、これまでの絵画シリーズに加え、大型のパブリック・アートを発表するなど、精力的に創作を続けています。



カルメン・ヘレラ
《赤い直角》
2017-2018年
塗料、アルミニウム
109.7 × 153.7 × 26.4 cm
Courtesy: Lisson Gallery

プレスリリース お問い合わせ 森美術館 広報事務局(共同ピーアール内): 日比、松川、伊藤、花上
Tel: 03-3571-5258 E-mail: mam-pr@kyodo-pr.co.jp

キム・スング

キム・スングは、祖父が道教の研究者であり、母親が書道家であったことから幼少期より朝鮮民族の伝統的な楽器であるタンソや弓道などの伝統文化に親しんでいました。ソウル大学美術大学大学院で絵画を学び、1971年にフランス政府奨学生としてフランスに移住、現在まで同地を拠点としています。1972年にニース国立装飾美術学校を卒業、その後、記号学と美学の学位も取得しています。マルセイユ高等美術学校(1974-2000年)とディジョン国立高等美術学校(2001-2011年)で教鞭をとりながら、数多くの展覧会に参加してきました。2019年には韓国国立現代美術館(ソウル)で大規模な回顧展「怠惰な雲」が開催されました。

「マルチメディア・アート」、または自身が「オープン・メディア」と呼ぶことを好むキムの作品群には、絵画、コンセプチュアル・ドローイング、写真、ビデオ、インスタレーション、パフォーマンスなどの様々なメディアが用いられてきました。本展出品作《森林詩》(2021年)は、自身の60本のビデオ作品がランダムに繰り返される映像と、オンラインで開催される詩の朗読パフォーマンスを組み合わせた3チャンネルのビデオ・インスタレーションです。詩の朗読に参加するのは100~200人の詩人、アーティスト、哲学者などで、会期中の満月の日に上映され、「森」が名称に入るこの美術館は、詩の森へと変貌を遂げます。新型コロナウイルスが蔓延する現状で考案された本作は、キムの創造性と哲学的探究を反映しています。

森羅万象の大いなる流動性のなかに人間の存在を捉える道教のように、キムにとって作品は、「環境、状況、自身」が出会う、新たな可能性に開かれた場所なのです。それが単一のメディアに固執するのではなく、領域横断的な手法を用いる要因でもあります。近年、ロボットやAIを使ったインスタレーションを手掛けるのも、急激にデジタル化が進む社会環境への応答だと理解することができます。

幅広い活動とジャック・デリダ(1930-2004年)とジャン=リュック・ナンシー(1940年-)などの哲学者、ジョン・ケージ(1912-1992年)やナム・ジュン・パイク(1932-2006年)などのアーティスト達との交流や意見交換を通じ、キムの作品は変容し続けてきました。「自分を見つけることは、自分を忘れることである」という彼女の真の独自性は、宇宙や大自然、人間社会、文化的営為などすべてを含んだ巨視的な世界観の中で、自身の変化すら恐れずに、創作と探求を続けてきたことにあるでしょう。



キム・スング 《月》 2003-2005年
ゼラチン・シルバー・プリント 82.5×60 cm(各、12点組)
展示風景:「月の満ち欠けのように」韓国国立現代美術館(果川)
2014-2015年

スザンヌ・レイシー

スザンヌ・レイシーは、カリフォルニア州立大学フレズノ校で心理学を学び、カリフォルニア芸術大学で美術を学びました。カリフォルニア芸術大学ではフェミニズム・アートの先駆者のひとりであるジュディ・シカゴ(1939年-)と、「ハブニング」の創始者であるアラン・カブロー(1927-2006年)に学び、自身のアートの方向性を確立しました。自身も長年にわたり教鞭をとり、現在は南カリフォルニア大学ロスキ芸術学校で教えています。フェミニズムをはじめとする社会的課題に取り組んできたレイシーは、2000年以降、美術の文脈で注目されているソーシャリー・エンゲージド・アート(または、ソーシャル・プラクティス)の先駆者として注目されています。これまで、テート・モダン(ロンドン)、ロサンゼルス現代美術館、ニューヨークのホイットニー美術館やニュー・ミュージアムなどの主要美術館に出品しており、2019年には大規模な回顧展「私たちはここにいる」がサンフランシスコ近代美術館とイエルバ・ブエナ・アートセンターで同時開催されました。

レイシーは作品を通して、ジェンダーや人種差別、老化、暴力などの社会問題に向き合ってきました。パフォーマンス、映像、写真、社会活動など多様な手法を用いた実践は、自身の身体についての個人的な作品から、数百人が参加する大規模プロジェクトまで、その手法もスケールも多岐にわたります。初期のパフォーマンスから一貫する特徴に、内容だけではなく、視覚的な美しさも重要視していることが挙げられます。

レイシーが活動を始めた1970年代の南カリフォルニアは、平等な市民権を求める社会運動が盛んだった時期で、レイシーは大学院に入学した1969年に初めてフェミニズム運動に参加しています。1972年には「沐浴」という性的暴行の被害者女性たちへのインタビューを題材にしたパフォーマンスを発表しました。彼女の作品の多くは、老化を含む社会的タブーを克服する試みです。

パフォーマンス作品《玄関と通りのあいだ》(2013年)では、ニューヨーク市ブルックリンの一角で、365人の参加者が多岐にわたる女性の問題について話し合い、約2,500人が傍聴しました。本展では3面プロジェクションの記録映像を作品として展示します。参加者のひとりはその後のインタビューで、「誰かと気持ちを通じさせながら、自分にとって重要な話を共有することは、繋がりを与えてくれた」といい、その繋がりはいまも「身体に残っている」と表現しています。レイシーが実践する平等な社会の実現に向けた継続的なアクションは、参加者の身体に「繋がり」を残し、それが集まった時にコミュニティが形成されるのです。レイシーの作品は、ソーシャリー・エンゲージド・アートの現代社会における有用性と、さらなる可能性を示しています。



スザンヌ・レイシー 《避けられない連合》1976年
パフォーマンス ヒルトモア・ホテル(ロサンゼルス)
撮影: Raúl Vega

プレスリリース お問い合わせ 森美術館 広報事務局(共同ピーアール内): 日比、松川、伊藤、花上
Tel: 03-3571-5258 E-mail: mam-pr@kyodo-pr.co.jp

三島喜美代

三島喜美代は、大阪市の十三で酒屋を営んでいた両親のもとに生まれました。高校卒業後、絵画に没頭するようになり、絵画教室でのちに夫となる三島茂司(1920-1985年)と出会い、具体美術協会の吉原治良(1905-1972年)に師事していたこともある三島茂司を通じて、先端の美術の動向に触れました。1954年から1969年まで独立美術協会に出品し、1963年に独立賞・須田賞、1965年にシェル美術賞展で佳作賞を受賞。1970年代からは国内外の多数の展覧会に出品しています。版画や陶を使った作品を制作していたことから、国際版画展や陶芸展などの展覧会に多く招待されてきましたが、近年は、現代美術としての評価も高まり、海外のアート・マーケットでも注目されています。

三島は1950年代、当時美術界を席卷していたアンフォルメルの影響を受けた抽象絵画を制作し、1960年代からコラージュ作品の制作を始めました。コラージュの素材は海外の雑誌や新聞、チラシ、使い古した布団や衣類、蚊帳など、どれも一般的にはゴミとして見過ごされるものばかりでした。1960年代後半からは、そこにシルクスクリーン印刷が加わり、コラージュと油彩、アクリル絵具を用いた混合技法で、独自の平面表現を追求していました。

この頃は日本が高度経済成長期を迎えようとし、社会に氾濫する情報が急速に増えていた時代でした。三島は「どんな情報も読み終わった途端に全部ゴミになる」と考え、「現代社会に氾濫する膨大な情報に対する不安感や恐怖感」を覚えたといいます。コラージュや印刷は、押し寄せる情報を作品に取り入れ、定着させる方法でした。1971年には代表作といえる新聞を陶で作る立体作品の制作を始めました。新聞やチラシの情報に、陶の質量を与えることで、情報が物質として重みを増し現実空間に作用します。

三島は、自身の創作について「ゴミを一生懸命作っている」といいます。その独自性ゆえに、美術や工芸といった従来の枠組みに収まらなかったことで評価が遅れていましたが、常に社会に向き合い、その本質を捉え続けてきた意義と重要性が、いまようやく明らかにされつつあります。



三島喜美代 《作品 92-N》 1990-1992年
陶にシルクスクリーン印刷 227×490×390 cm
撮影：小川重雄 画像提供：美術資料センター(東京)

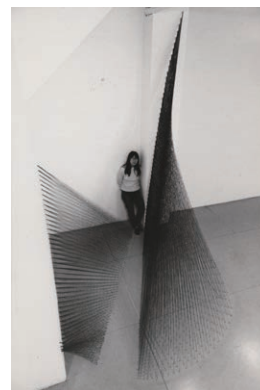
宮本和子

宮本和子は現代美術研究所(東京)を卒業後、1964年に渡米しニューヨークのアート・スチューデント・リーグで学びました。以降、ニューヨークを拠点に活動しています。1968年に同じビルにスタジオを構えていたソル・ルウィット(1928-2007年)に出会い、最初のアシスタントとなります。1974年から1983年まで女性アーティストによる非営利団体であるA.I.R.ギャラリーに所属していました。1986年には自身のギャラリー「ワントゥエンティエイト」を立ち上げ、現在も運営しています。1970年代から現在まで、ニューヨークを中心に数々の展覧会に出品してきましたが、近年はインドの第2回コチ=ムジリス・ビエンナーレ(2014年)やマニフェスタ12(2018年)などの国際展に招待されるなど、その活動が改めて注目されています。

平面から立体、インスタレーション、そしてパフォーマンスなど多岐にわたる宮本の表現は、1970年代までの作品群と1980年代以降のものに大きく分けられます。1970年代には、出品作《黒い芥子》(1979年)や《車輪》(1976年)のような、幾何学図形や直線で構築された、ミニマリズムの影響がみられる作品を発表していました。糸と釘だけで構築される立体空間は、観る側の視点によって見え方が変化し、作品において鑑賞者の参加や身体性が重要であることがわかります。「日本人であることは、ミニマリストということ」だというように、宮本は無駄を削ぎ落す日本的な表現と接点を見出し、ミニマリズムを独自の観点から考察しました。

1980年代以降は、出産をきっかけに自然や社会との関係性などに関心が移り、機械的で無機質な表現から離れ、木の枝や葉、縄などの自然素材を用いた有機的なインスタレーションを発表しています。また、パフォーマンスも積極的に発表し、自身がニューヨークの街頭で宇宙飛行士やホームレス、売春婦に扮装する作品などがあります。職業的、人種的マイノリティなど、社会から疎外された存在をモチーフに、身体を通して個人と社会の関係性を表現してきました。

日本を離れ、白人男性中心のニューヨークの美術界において、宮本は独自の表現を追求してきました。自ら運営するワントゥエンティエイトでは、多様な人種、民族、ジェンダーのアーティストたちへ積極的に機会を与え、有名無名を問わず平等に作品を展示してきたといいます。宮本の幅広い作品群や活動は、彼女の社会への応答であり、戦いの軌跡だといえます。



宮本和子 《黒い芥子》
1979年 糸、釘 サイズ可変
Courtesy: EXILE, Vienna;
Take Ninagawa, Tokyo
展示風景:「新作展」A.I.R.ギャラリー
(ニューヨーク)1979年

プレスリリース お問い合わせ 森美術館 広報事務局(共同ピーアール内): 日比、松川、伊藤、花上
Tel: 03-3571-5258 E-mail: mam-pr@kyodo-pr.co.jp

センガ・ネングディ

カリフォルニア州バサデナとロサンゼルスで育ったセンガ・ネングディは、カリフォルニア州立大学でダンスと彫刻を学び、非欧米圏である日本の文化とミシェル・タビエの『日本のアヴァンギャルド・アート』（1962年）で知った具体美術協会に興味を持ったことから1966年に一年間早稲田大学に留学します。日本では、歌舞伎や能、雅楽などの伝統的な舞台芸術に触れました。1970年代前半には、ブラック・アーツ・ムーブメント(1965-1975年)の重要なアーティストとなります。以降、アメリカ国内では数多くの展覧会に参加してきましたが、近年、国際的にも評価が高まり、2017年には第57回ベネチア・ビエンナーレに出展、2019年から2021年にかけて大規模な展覧会がミュンヘンのレンパッハハウス美術館(2019-2020年)を皮切りに、サンパウロ美術館(2020年)、デンバー美術館(2020-2021年)、フィラデルフィア美術館(2021年)を巡回しています。

彫刻とパフォーマンスを融合したネングディの作品は、舞台芸術、西アフリカの儀式、ジャズなどの現代音楽、また、1960年代半ばにピークを迎えた公民権運動などの影響がみられます。しかしネングディは、文化的、政治的な内容を直接表現するのではなく、コンセプチュアルな手法で即興性や演劇性を探求し、独自の抽象表現を確立しました。

1970年代中頃からは、代表作であるストッキングを用いた「R.S.V.P.」シリーズの制作を始めます。自身が妊娠と出産を経験したことで、身体の弾性に興味を抱いたことがきっかけとなっています。砂が入れられ、引き伸ばされたストッキングは、具体的な身体の部位を表現したものではありませんが、その有機的な形は人間の身体を連想させます。

ネングディは自身の作品について、「黒人であること、女性であること、自分の年齢への応答」であり、「子供を持ち、母親の世話をし、人生が与えてくれるその他多くのことを経験した人間」を表しているといいます。また、「私の作品は、大多数(社会)に『ノー』と言われたすべての人たちに『イエス』と言うものである」と述べています。彼女の作品はしばしばフェミニズムやポスト・ミニマリズム、ブラック・アーツ・ムーブメントと関連付けられますが、厳密にはそのどれにも当てはまりません。それは、作品が個人の経験に深く根差しており、また常に多くの人に開かれたものだからなのです。



センガ・ネングディ
《R.S.V.P.でのスタジオ・パフォーマンス》 1976年
ゼラチン・シルバー・プリント
撮影：Ken Peterson
画像提供：Sprüth Magers; Thomas Erben Gallery;
Lévy Gorvy

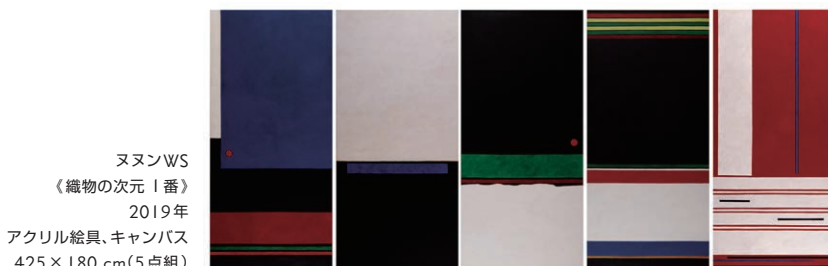
ヌヌンWS

ヌヌンWSは、敬虔なイスラム教徒の家庭に生まれ、幼い頃からスポーツや厳格な宗教儀式を日々実践していたことが強い自立心を形成し、高校を卒業する頃にはアーティストになることを決心していました。その後、スラバヤ美術アカデミーで学び、当時は数少なかったインドネシアの女性アーティストのひとりであるカルティカ・アフアンディ(1934年-)や、抽象的な風景画で知られていたナシャー(1948-1994年)の影響を受けます。1970年代からインドネシア国内で数々の展覧会に出品し、1990年代からはヨーロッパでの展覧会にも参加しています。

ヌヌンは、限られた色彩と矩形で構成された抽象絵画を通して、色彩表現の無限の可能性を探究しています。インスピレーションの源泉はジャワ島の日常や建築、自然環境であり、その背景には、ポロブドゥール遺跡をはじめとする様々な寺院や地域社会の風習、織物、ソケット(生地)、パティックなどの伝統工芸に関する20年以上にわたる独自の研究があります。

ヌヌンの表現は、1960年代に欧米で始まったミニマリズム絵画に親和性が見られますが、感情表現やイリュージョンを否定し純粋な色彩だけを追求するミニマリズムに対して、彼女の絵画はモチーフの色彩を導入として、豊かな情感や深い精神世界を描いているところに独自性があります。ヌヌンは色彩の中に「スピリチュアル・バリュー」という値を見出しています。彼女にとってスマトラ島西部のミナンカバウの織物の赤と、スマトラ島北部のアチェの織物の赤は、スピリチュアル・バリューにおいて全く異なるものだといいます。出品作《織物の次元1番》(2019年)は、織物の色の持つ多様なスピリチュアル・バリューを表したもののなのです。

ヌヌンは絵画を描くことを「スピリチュアルな旅路」と言い、人生を「魂の風景」と表現します。彼女は、日々の生活、長い時間をかけて人々が築いてきた豊かな文化、そして壮大な自然などを起点として、人間の内面に広がる精神世界を洗練された色と形で捉えてきました。それらは彼女自身の人生であり、また、ひとりひとりの人生に秘められた無限の広がりを示しているようです。



ヌヌンWS
《織物の次元1番》
2019年
アクリル絵具、キャンバス
425 × 180 cm(5点組)

プレスリリース お問い合わせ 森美術館 広報事務局(共同ピーアール内): 日比、松川、伊藤、花上
Tel: 03-3571-5258 E-mail: mam-pr@kyodo-pr.co.jp

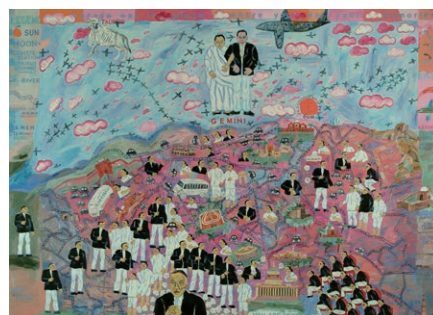
アルピタ・シン

アルピタ・シンは、西ベンガルのバラナガルに生まれ、幼い時にデリーに移り住みました。イギリスからの独立間もない1950年代に、デリー・ポリテクニク芸術学部でアートを学び、卒業後、政府が運営する織物工房で働きテキスタイルに関する知識と技術を習得しました。1972年に初個展をニューデリーで開催し、以降は、国内外の数多くの展覧会に参加しています。海外では、ロンドンのロイヤル・アカデミー・オブ・アーツ(1982年)、ポンピドー・センター(パリ、1986年)、ニュー・サウス・ウェールズ州立美術館(1993年)などに出品し、2019年には大規模な回顧展がニューデリーのキラン・ナダール美術館で開催されました。2011年にインドにおける高位勲章のひとつであるパドマ・ブーシャン勲章を受章、まさに国民的アーティストといえます。

シンの絵画は、断片的に描かれた様々な要素が織りなす、象徴的な物語性を特徴としています。神話や歴史的題材から、急激に発展するインド現代社会の諸問題、実娘との関係などフェミニズムを連想させる自伝的な内容まで、幅広い主題が扱われています。初期には風景画を描いていましたが、1970年代中頃から出品作《無題》(1976年)にみられる抽象表現を始めました。1990年代には抽象と具象、シンボルや文字と数字が渾然一体となった現在のスタイルへと発展します。伝統的なインドの細密画を連想させる空間構成と、ピンクと青を基調とする鮮やかな色彩が、独自の世界観を作り出しています。また、細密な描写やパターンの反復は、織物工房で働いていた時に習得した、インドの伝統的な刺繍であるカンタ刺繍の表現に重なります。

出品作《私のロリポップ・シティ：双子の出現》(2005年)では、象徴的に描かれた双子を中心に飛行機などが上空に浮かび、デリーの地図の上には政治家のような男性達が描かれています。周囲に書かれた文字の中に「57人の男性と12人の女性(残りは失敗し、焼かれ、消された)」とあり、よく見ると男性達に混じって半分地面に埋まっている17人の女性が描かれています。さらに「この地図は間違い 従うな」とあり、本作が首都デリーを支配する権力構造やヒエラルキーへの批判であることがわかります。

同じく出品作の《破れた紙、紙片、ラベルの中でシーターを探す》(2015年)には襲われる女性たちが描かれ、画面の上部には「シーター あなた 私 私たち」とあります。本作は若い女性たちの誘拐事件や性的暴行事件が後を絶たないインドの現状への応答です。紙を繋ぎ合わせて描かれた川には「ORIGAMI」という文字が浮かび、これは平和を祈るための日本の千羽鶴に着想を得ています。豊かな想像力と卓越した色彩感覚で描かれる物語の背景には、より良い社会や人間の在り方を祈る、彼女の真摯な姿勢があります。



アルピタ・シン 《私のロリポップ・シティ：双子の出現》
2005年 油彩、キャンパス 152.4×213.3 cm
所蔵：ヴァデラ・アート・ギャラリー(ニューデリー)

ロビン・ホワイト

ロビン・ホワイトはオークランド大学で絵画を学び、ニュージーランド(アオテアロア)を代表するモダニスト、コリン・マカーン(1919-1987年)に師事、1970年代後半にはニュージーランド地域主義の画家として注目されていました。1982年に家族でキリバス共和国の首都タラワに移住。タラワでは地域の日用品や装飾品などの伝統工芸の手法と素材を、作品に取り入れるようになりました。1999年にニュージーランドに帰国し、現在までマスタートンを拠点としています。2022年にはニュージーランド国立博物館テ・パパ・トンガレワにて大規模な回顧展が予定されています。

伝統工芸の手法と素材を用いたホワイトの平面作品は、拡張された絵画空間としての意味を持っています。出品作《大通り沿いで目にしたもの》(2015-2016年)には、地域の生活には欠かせない樹皮製の布である「タバ」を用いています。タバは女性達の共同作業によって作られるため、ホワイトの作品制作にも共同作業が取り入れられるようになりました。家屋の建材や室内のインテリアなどの実用的な用途に限らず、タバには新生児や遺体を包むといった儀式的な用途もあります。ホワイトの作品でも、特別な行事の際には、制作に携わった女性達がその上に座ったり、寝転がったり、裸足で踊ったりもします。

これらの作品は絵画空間を拡張するだけでなく、ひとりのアーティストのみが作者であるという西洋近代以降の個人主義的な価値観からの解放ともいえます。ホワイトは、これまでフィジー共和国、トンガ王国、キリバス共和国、アオテアロアのほかに、日本の女性達ともコラボレーションをしています。

タラワの人々にとって海は食料の供給源であり、他の島とのコミュニケーションの手段であり、そして神聖な存在でもあります。その場所や環境への応答であり、伝統工芸や生活様式を取り入れたホワイトの作品にもまた、アイデンティティの問題や現代社会への批評的視点、環境への配慮など、複層的な意味が込められています。その根底には、ホワイトが信仰するバハーイー教の平和思想、男女平等、社会貢献の精神、そして人類への深い慈しみがあります。



ロビン・ホワイト&ルハ・フィフィタ
《大通り沿いで目にしたもの》(「コ・エ・ハラ・ハンガトゥヌ：まっすぐな道」シリーズより)
2015-2016年 顔料、植物染料、樹皮布 2,400×380 cm
展示風景：「大通り沿いで目にしたもの」ビクトリア国立美術館(メルボルン) 2016年 撮影：Michael Fudakowski

プレスリリース お問い合わせ 森美術館 広報事務局(共同ピーアール内)：日比、松川、伊藤、花上
Tel: 03-3571-5258 E-mail: mam-pr@kyodo-pr.co.jp

?! 展覧会関連プログラム

■キュレータートーク ※オンライン配信、日英同時通訳付

本展の企画を担当したキュレーターが、展覧会のコンセプトや企画のプロセスなどについて語ります。

出演:マーティン・ゲルマン(インディペンデント・キュレーター)、片岡真実(森美術館館長)

モデレーター:徳山拓一(森美術館アソシエイト・キュレーター)

日時:2021年4月22日(木)17:00~18:30(ライブストリーミング) **料金:**無料 **お申し込み:**不要

■アーティストトーク ※オンライン配信、日英同時通訳付

本展での作品を含め、これまでの活動についてアーティスト自身が語ります。

出演:フィリダ・バーロウ(「アナザーエナジー展」アーティスト) **聞き手:**マーティン・ゲルマン、片岡真実

日時:2021年5月28日(金)18:00-19:30(ライブストリーミング) **料金:**無料 **お申し込み:**不要

■ Meet the Artists 山本高之「イクトウス」

本プロジェクトでは、魚の世界の「性」の多様なあり方を学び、アーティストの山本高之がミュージシャンや子どもたちと共に表現します。ワークショップ形式で歌や衣装、大道具などを制作し、最後にはミュージカルとして上演。その上演の様子を、映像作品として公開します。

出演:山本高之(アーティスト)

日時:2021年6月~8月(予定) **会場:**森美術館、東京ドイツ文化センター ほか

対象:6歳~10歳

主催:株式会社 precog、森美術館

企画:田中みゆき(インディペンデント・キュレーター)、株式会社 precog、森美術館ラーニング

企画協力:日本財団 DIVERSITY IN THE ARTS

助成:公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京、日本財団

協力:東京ドイツ文化センター

■ まちと美術館のプログラム 「アート・キャンプ for under 22 Vol.6 IN/BETWEEN:美術館をつなぐ」 ※日本語のみ

本プログラムでは、熊本県小国町にある坂本善三美術館と森美術館をオンラインでつなぎます。ふたつの美術館をつなぐ主人公は、双方の美術館で募ったユース世代の参加者たち。それぞれの美術館のキュレーターやアーティストたちとオンラインで出会い、アートの実践の場を目の当たりにし、「アートって何?」という問いを自分の言葉で語り合います。地域を越え、アートをとおして出会う人と人とのつながりを体験してみませんか。

出演:んまつーポス(コンテンポラリー・ダンスカンパニー)、岡山直之(アーティスト)、坂崎隆一(アーティスト)、山下弘子(坂本善三美術館学芸員)、徳山拓一(森美術館アソシエイト・キュレーター)、白木栄世(森美術館アソシエイト・ラーニング・キュレーター) ほか

実施期間:2021年5月~7月(予定)

対象:13歳~22歳

会場:Zoomを使用したオンライン・プログラムとして実施します。

主催:森ビル株式会社、森美術館、坂本善三美術館

プレスリリース お問い合わせ 森美術館 広報事務局(共同ピーアール内): 日比、松川、伊藤、花上
Tel: 03-3571-5258 E-mail: mam-pr@kyodo-pr.co.jp

まちと美術館のプログラム「アート・キャンプ for under 22 Vol. 7 ヒューマン・ビギン:アシタナニスル?」

未来を一緒に担っていく世代のみなさんと、これまで当たり前だと考えられていた「性」の規範を更新するようなメッセージを考え、身体をつかって表現します。ダンスを通して自分らしく生きること＝「性」にまつわる価値観を探ってみませんか?ここで生まれたダンスはSNSのプラットフォームなどで広く配信し、ワークショップ後にも、多くの方々と共有することを目指します。

出演:辻本知彦(ダンサー・振付家)、菅原小春(ダンサー・振付家)

実施期間:2021年6月~8月(予定)

対象:15歳~22歳

会場:森美術館 ほか、プログラム過程でZoomを使用したオンラインでの対話を行う場合もあります。

主催:株式会社precog、森美術館、森ビル株式会社

企画:株式会社precog、森ビル株式会社、森美術館ラーニング

助成:公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京、日本財団

企画協力:日本財団 DIVERSITY IN THE ARTS

*出演者は予告なく変更になる場合があります。予めご了承下さい。

*他にもアーティストトークや専門家によるトークセッション、スクールプログラム、アクセスプログラムなど、さまざまな企画を予定しています。プログラムの詳細や最新情報は森美術館ウェブサイトをご覧ください。

www.mori.art.museum

プログラムに関するお問い合わせ: 森美術館 ラーニング担当

Tel:03-6406-6101(月~金:11:00-17:00) Fax: 03-6406-9351 E-mail: mam-learning@mori.co.jp

関連情報

■ 展覧会カタログ

本展の開催に際し、「ガイド版」と通常版、2種の展覧会カタログをご用意しました。展覧会の手引きとして最適な「ガイド版」は展覧会初日に販売を開始します。

【ガイド版】

本展を企画したキュレーター2名(片岡真実、マーティン・ゲルマン)による主論考2本と対談や、作品図版ページでの16名のアーティストの解説、作品リストを掲載。

サイズ:A4変形(28.2×21 cm) **ページ数:**168 **言語:**日・英バイリンガル

制作・発行:森美術館/フィルムアート社 **発売日:**2021年4月22日(展覧会初日)

定価:1,870円(税込)



【通常版】

本展を企画したキュレーター2名(片岡真実、マーティン・ゲルマン)による主論考2本や、各出展アーティストの個人史や作品の変容に焦点を当てた世界各地の専門家による論考16本、本展の展示風景図版と作品リスト、さらにアーティスト略歴と参考文献リストを掲載。

サイズ:A4変形(28.2×21 cm) **ページ数:**368 **言語:**日・英バイリンガル

制作・発行:森美術館/フィルムアート社 **発売日:**2021年6月中旬(予定)

定価:5,500円(税込)

プレスリリース お問い合わせ 森美術館 広報事務局(共同ピーアール内): 日比、松川、伊藤、花上
Tel: 03-3571-5258 E-mail: mam-pr@kyodo-pr.co.jp

■ 展覧会オリジナルグッズ

館内の「森美術館 ショップ 53」では、本展のロゴをデザインしたTシャツやサコッシュなど、展覧会オリジナルグッズをご用意しています。また、展覧会カタログ「ガイド版」とサコッシュを大変お得なセットとして、2,500円で販売します。

- ・Tシャツ(2色:白、シルバーグレー) 2,640円(各)
 - ・サコッシュ 1,100円
 - ・缶バッジ 550円
 - ・ブドウ糖ラムネ 540円
- (全て税込価格)



お問い合わせ: 森美術館 ショップ 53

Tel: 03-6406-6118 営業時間: 10:00-22:00(祝日を除く火曜日は17:00まで) ※美術館の開館時間に準ずる

■ お得な学生・子供応援キャンペーン 「今だけ学生・子供ワンコイン」

展覧会初日の2021年4月22日(木)から5月31日(月)までの期間限定で、通常、学生料金が平日1,300円、土・日・休日1,400円、および子供料金が平日700円、土・日・休日800円のところ、一律、ワンコインの500円で入館できる「今だけ学生・子供ワンコイン」を実施します。今、新型コロナウイルス感染症の影響を受けている多くの学生さんやお子さんに向けてフィジカルな学びや体験の機会を提供する、森美術館の学生・子供応援キャンペーンです。

期間: 2021年4月22日(木)～5月31日(月)

料金: 学生・子供 一律500円

[通常の学生料金は土・日・休日1,400円(平日1,300円)、子供料金は土・日・休日800円(平日700円)]

- * 学生: 高校、大学、大学院、短大、専門学校に通学の方が対象
- 子供: 4歳から中学生までが対象

プレスリリース お問い合わせ 森美術館 広報事務局(共同ピーアール内): 日比、松川、伊藤、花上
Tel: 03-3571-5258 E-mail: mam-pr@kyodo-pr.co.jp

森美術館「アナザーエナジー展」同時開催小プログラムのご案内

会期：2021年4月22日(木)－9月26日(日) 会場：森美術館(六本木ヒルズ森タワー53階)



MAMコレクションは、森美術館の収蔵品を、
多様なテーマに沿って順次紹介する展覧会シリーズです。

MAMコレクション013:

さまざまな線、宇宙のぜんぶ

— 草間彌生、プラバヴァティ・メッパイル、ツイ・チャウエイ(蔡佳葳)

主催：森美術館

企画：熊倉晴子(森美術館アシスタント・キュレーター)

<https://www.mori.art.museum/jp/exhibitions/mamcollection013/index.html>



ツイ・チャウエイ(蔡佳葳)
《円II》
2011年
ビデオ、カラー、サイレント
56秒



MAMスクリーンは、世界の多様な映像作品のなかから
選りすぐりのシングル・チャンネル作品を上映するプログラムです。

MAMスクリーン014:

シプリアン・ガイヤール

主催：森美術館

企画：椿 玲子(森美術館キュレーター)

<https://www.mori.art.museum/jp/exhibitions/mamscreen014/index.html>



シプリアン・ガイヤール
《海から海へ(オーシャン2オーシャン)》
2019年
ハイビジョン・ビデオ、サウンド
10分56秒
Courtesy: Sprüth Magers, Berlin, London and Los Angeles; Gladstone Gallery, New York and Brussels



MAMプロジェクトは森美術館が世界各地のアーティストと
実験的なプロジェクトを行うシリーズです。

MAMプロジェクト029:

オスカー・ムリーリョ

主催：森美術館

企画：矢作 学(森美術館アシスタント・キュレーター)、森美術館ラーニング

後援：駐日コロンビア共和国大使館

<https://www.mori.art.museum/jp/exhibitions/mamproject029/index.html>



オスカー・ムリーリョ
《攪乱された周波(トルコ、コロンビア、ドイツ)》
2013-2019年
ボールペン、万年筆、鉛筆、サインペン、蛍光ペン、
油性マーカー、絵具、クレヨン、ホッチキス、天然顔
料、ごみ、油彩、オイルスティック、キャンバス ほか
170×185 cm
撮影：Tony Prikryl
画像提供：アスベン美術館

プレスリリース

お問い合わせ 森美術館 広報事務局(共同ピーアール内): 日比、松川、伊藤、花上
Tel: 03-3571-5258 E-mail: mam-pr@kyodo-pr.co.jp